編者まえがき

満 70 歳を迎えられた魚住昌良先生と斯波義信先生は、2001 年 3 月、規定に基づき国際基督教大学を退任された。両先生は、その学問と暖かなお人柄によって、学生はいうに及ばず、後に続く私たち同僚を常に導き、大きな知的刺激を与えてきてくださった。本号は、両先生への感謝を込めて編まれたものである。

魚住昌良先生は、1975 年より 26 年の長きにわたって本学で教鞭をとられた。我が国における西洋中世史研究の中心的存在である先生は、その該博な知識を教養学部の授業で、また比較文化研究科の大学院生たちに、情熱をこめて語り続けてくださった。この間、大学院比較文化研究科長と大学院部長の重責を担って大学行政に手腕を発揮されたが、何より特筆すべきは 1983 年より 10 年以上にわたってアジア文化研究所長の職を務められたことである。長（武田）清子先生の後を襲って、西洋史家である魚住先生がアジア文化研究所の所長を務められるというのは、やや不思議な感じがする。しかし、アジア文化研究所の活動がそもそも比較史的方向を内包していたこと、そして何より比較史・比較都市史研究会の創設メンバーである魚住先生ご自身が西洋史の枠を越えた幅広い学問関心を持っておられたことが、この幸福なる結合を可能にしたのだと思う。魚住所長のもとで、内外の優れた研究者が集い、「アジアの封建制」「中世末期近世初期の民衆蜂起——日本とドイツの比較——」「民衆蜂起の心性——ヨーロッパと東アジアの比較——」といった刺激的なシンポジウムが開催された。これらの活動が本学の学問的評価を大いに高めたことを、感謝をもって記しておきたい。

魚住先生のもとには、日本のみならず海外からも学生がその教えを求めて集まった。魚住先生は彼ら／彼女たちの関心を伸びやかにはぐくみ、幅広い分野の研究者を育ててこられた。ここに寄せられた論考が示すように、先生の闊達な学風は、先生のもとで学んだひとりひとりの学問の中に、確実に継承されているように思う。

斯波義信先生は、大阪大学、東京大学を経て、1991 年より国際基督教大学社会科学科の教授に就任された。以後 10 年間、大学院比較文化研究科の教授も兼任され、中国史、東アジア史に関わる講義を担当、多くの学生、大学院生をご指導くださった。また、アジア文化研究所の所員として、シンポジウム「日本の都市空間と近代性の超克の問題」や公開講演会で、中国の都市空間の歴史および比較都市史に関する講演を行ってくださるなど、深い学識と世界的な知のネットワークをもって研究所の活動を側面からいつも支えてくださった。

斯波先生はつねに最新の研究をふまえた内容をわかりやすく講義されてきた。退任された後はそのような講義をうかがうことができず残念に思っていたところ、『中国都市史』（東洋叢書 9、東京大学出版会、2002 年）『華僑・華人事典』（弘文堂、2002 年）などを陸続と刊行された。これらのお仕事によって、引き続き先生の学恩に浴することができることに心から感謝申しあげたい。現在は、財団法人東洋文庫の理事長として多忙な日々をおくられているが、私どもが学生をつれてお訪ねすると、自ら書庫を案内して貴重な文献を見せてくださるなど、以前と変わらぬ穏やかで暖かい応対をしてくださる。研究者、教育者として、そしてなにより人間として尊敬する斯波先生をアジア文化研究所にお迎えできたことを感謝し、本書を捧げたい。

御退任前の数年間、魚住先生と斯波先生は、共同で一般教育の「歴史学」のクラスを担当されていた。最終講義にいらした他大学の方が舌をまくような高度な内容を分かりやすく平易に語るというのは、お二人のような学者にしてはじめて可能な力業である。まことに贅沢

な授業であった。ここでお二人が「都市」を共通テーマとしておられたこともあり、本号の企画にあたって都市史の中から共通論題を設定することにした。斯波先生には都市の秩序に関わるお仕事があり、魚住先生も近年、都市の平和について関心を深めてこられた。「都市と平和」を共通論題に選んだのは、そうした事情である。

魚住先生は本号のために、ヨーロッパ中世の「平和」観念に思想史的にアプローチした上で、平和団体としての都市共同体の意味を考察する論文を構想されていた。しかし、御退任後に体調を崩されたため、その論文をご執筆いただくことはできなかった。まことに残念であったが、一番無念であったのは、先生ご自身であったことと思う。幸い、順調に健康を回復されていらっしゃるので、先生の論文を読ませていただける日も近いと思う。

なお、本書の編集にあたっては、アジア文化研究所助手の宮沢恵理子、孫建軍、高崎恵、宇野彩子諸氏の尽力を得たこと、欧友社印刷の佃吉郎氏、小熊未央氏には印刷製本のお骨折りを願ったことを記して謝意に代えさせていただきたい。また前述の事情で、魚住先生の論文掲載をお許しくださったICU社会科学研究所社会科学ジャーナルの皆さまにも心より御礼を申しあげます。

2002年8月5日

古藤　友子

高澤　紀恵